

W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第38号

いま再びの《アマデウス》

モーツァルトへの手紙 (その14)

会員番号 K.618 加藤 明



初めて意識してあなたの音楽を聴きだしたのは半世紀前、17歳の春でした。

ハイドン研究の泰斗大宮真琴が紹介するラジオ番組で、人生初のモーツァルト体験がありました（「リンツ」、「プラハ」「パリ」といった地名のついたシンフォニーなどを不思議にも充実した気分愉しく聴いた思い出があります）。

我がモーツァルト体験の嚆矢ですが、あれから半世紀を経て、小生は丁度あなたの厳父レオポルトが亡くなった齢、68歳を迎えました。

そう、お父さんと小生はあなたのほぼ2倍も長生きしたことになりますね。

小生は父が50歳、長兄が62歳である世に逝ってしまい、父方の祖父が67歳まで生きたので、その祖父の寿命をどこかで意識してここまでやってきました。

ほんとにあなたとあなたの音楽のお陰で肩肘張らず卑屈にもならず今日までやって来れたことを感謝しています。

雑念と妄執の虜だった半世紀前、心ときめかせて聴いたあなたの異次元の音楽。

正に一生の宝に出逢えたことを噛み締めつつ、また凝りもせず駄文を綴ります。

この秋、久しぶりにウィーン時代のモーツァルトを老サリエリの独白という仕掛けで撮った映画《アマデウス》(1984年公開)をDVDで観ました。

この作品は何度観ても味わい深く、2時間半と比較的長編の映画なのにほんとに短く感じられるのが常です。

小生にとっては観るたびに新たな発見があることもこの映画ならではの奥深さというか他に類をみない特徴の一つとなっているようです。

ある時はP・シェーファーの時代考証を反映した巧みな構成力に拍手をし、またある時はサリエリ役のF.M. エイブラハムの絶妙な演技力や今日的なモーツァルト像を決定づけるようなトム・ハルスの役作りに感嘆を禁じ得ない、といった具合です（コンスタンツェ役のE. ベリッジはイメージが食い違った。実際のコンスタンツェは色んな意味でもっと良妻に違いない

筈なのですが・・・)。

モーツァルトを演じたトム・ハルス役作りの凄さは彼がモーツァルトの「自由な精神」を徹底的に体現しえたことに起因していると思います。

この「自由の精神」こそはモーツァルトの賞賛すべき特質であり、小生に言わせれば、モーツァルトの「天才」とは「自由」と同義なのです。



当時の封建的な貴族社会が産んだ秩序や仕来りに敢然と向き合い、その葛藤の末に勝ち取った貴にして重い「自由」。

最晩年のE. シカネーダー一座と組んで、世界的にも初めてオペラに市民権をもたらした《魔笛》を思い起こしてみてください。

ここではその後の貴族社会の雪崩のような崩壊を予言する「自由」が、パパゲーノとパパゲーナの二重唱を待つまでもなく大らかに謳われていました。

当時流行りの歌芝居、どさ周りの役者シカネーダーが必死にモーツァルトへ曲作りをせがむシーンは《魔笛》の成立事情を伝えるだけでなく、当時の大衆演芸の在り様が垣間見えて、とても印象的でした。

《魔笛》作曲のために缶詰になったキオスクで、モーツァルトがシカネーダー一座のメンバーたちと朝までどんちゃん騒ぎするシーンなど、この《アマデウス》はM. フォアマンの監督としての力量も絶大で、秘められたモーツァルトの暮らしぶりと《魔笛》の裏舞台を見事に描いて秀逸でした。



もう一つ、昨年逝去したこの映画の音楽担当N. マリナーの貢献も見逃せません。

小生が今回数えた同映画でのモーツァルトの曲は全部で12曲（重複している曲は一曲として）ですが、オペラが冒頭の《ドン・ジョバンニ》を皮切りに《魔笛》、《フィガロの結婚》、《後宮からの逃走》の4曲、ピアノ協奏曲が20番と22番（K. 466とK. 482）、宗教曲は《ハ短調ミサ》と《レクイエム》とそれぞれ2曲、交響曲（K. 183）と器楽曲（K. 299）、そしてセレナード（K 361）および8歳で書いたロンドンスケッチ帳（K 15 a）がそれぞれ一曲ずつとなっています。

あれほど熱心に書き上げた弦楽の室内楽曲や《トルコマーチ》を始めとするピアノソナタ群のみならず、この映画ではモーツァルトの代名詞とも言えるセレナード《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》も天下の三大シンフォニーも採用されていません。

これは恐らくP・シェーファーの脚本上の事情からやむを得ない選曲だった、と思われそうですが、オペラへの比重がとに高まったことがその理由かもしれません。

何といっても古今の大傑作《ドン・ジョバンニ》がこの映画の全編を貫く決定的な導入部と展開部を担っていることに注目すべきなのでしょう。

サリエリの自傷行為を映す直前の騎士長のテーマが後半はモーツァルトの父レオポルト（R. ドートリス）の訃報を聞いたモーツァルトに襲い掛かる恐ろしいテーマとして蘇るという構成には思わず唖ってしまったものでした。

（それはそうと、この《ドン・ジョバンニ》の台本作家ダ・ポンテが映画には一度も登場し

ない。何か物足りない感じがしたのは小生だけだろうか?)



この映画に登場したモーツァルトの父上レオポルトも興味深いものでした。

レオポルトは1719年アウグスブルクの製本師の家に生まれ、1787年にザルツブルクで亡くなっていますから、享年68歳ということになります。

35歳で没した息子モーツァルトの二倍近くも長生きしたことになりますが、当のモーツァルトは父の死後わずか4年しか生きられませんでした。

実は、この68歳、考えてみますと当時の平均寿命が約40歳と言われていたことから、モーツァルトが極端に短命ということも言えないばかりか、逆にレオポルトが大変な長寿を全うした、というべき享年なのです。

レオポルトはその死の2年ほど前にウィーンの息子を訪ねています。

その間の様子がこの映画で撮られたわけですが(ほんとは、ザルツブルクからマルシャンという弟子を引き連れてきたのですが、映画では全く触れていません)。

《アマデウス》ではこの父のウィーン訪問時の二人のギクシャクしたやりとりやモーツァルトの妻コンスタンツェとの反目が興味深く描かれていました。

親子はほぼ4年ぶりの対面であったのですが、2ヵ月ほど滞在してザルツブルクに戻りました。

それが、二人の永の別れとなってしまったわけですが、丁度モーツァルトが《ドン・ジョバンニ》や《アイネ・クライネ・ナハトムジ

ク》など傑作を生み出す時期と重なっており、レオポルトはこうした後世に残る偉大な作品を知ることなく他界したことになります。

それでも、ウィーン滞在中に高名なハイドンと同席して弦楽四重奏曲いわゆる《ハイドンセット》や名高い20番のピアノ協奏曲の公演に立ち会うことができたことは、この上ない冥途の土産となったものと推察します。

あのパパ・ハイドンから直々に「あなたの息子さんは当代随一の作曲家です」とべた褒めされて大いに喜んだと言われていたから。



レオポルトとヴォルフガング親子の長い確執はその本質として、当代一流の作曲家であり理論家であっても生涯ザルツブルクの宮廷副楽長の職に甘んじざるを得なかった父と、その宮廷から抜け出してウィーンに移り住み、フリーのプロミュージシャンとなった息子との生き方の違いから来るものであり、それは時代が産んだ必然と言わざるを得ません。

この必然の臭いをかぎつけた者はもうモーツァルト家とモーツァルトから眼が離されなくなってしまうのです。

何故なら、モーツァルトの「人間」をそこに見出すことになるからです。

そう考えると、モーツァルトはその気高く天衣無縫とも言える音楽で「自由」を知らしめ、ウィーンでの独立という実存的な「自由」(自らの意志で歩むべき道を選択)を後世に啓示した哲人でもあった、と言うべきかも知れません。

end

吹奏楽器のフォルテ

会員番号 K.10 畠山久雄

秋の初め、県民会館にてNHK交響楽団員による“J. ハイドン／木管五重奏のためのディヴェルティメント 変ロ長調”を聴いた。この曲は多くのアマチュア団体も演奏する曲であり、モーツァルト広場の仲間も耳にしているかも知れない。

最初に鳴った音を聴いて、随分と小さい音量と感じたのが正直な感想である。譜面を見ると最初の2小節はフォルテの指示であり、小さく演奏しなければならない理由は見当たらない。私が音量が小さいと感じたのは、それまで何度も聴いたアマチュア団体の音量が耳に残っていたためかもしれない。確かに県民会館は生音が客席に届きにくい問題を抱えてはいるが、そういった問題でないことに間もなく気付いた。

アマチュアは、譜面に記されたフォルテ（強く）の指示に忠実？に、各自が大きな音を出すことに努める。ご承知の通り、木管五重奏はフルート、オーボエ、クラリネット、ファゴットそしてホルンから成る。大きい音ならば、断然ホルンが他の楽器に勝る。めいめいが最大音量で吹いてしまうと、ホルンの音が全体を覆い隠し、いわゆるバランスが崩れてしまい心地よい響きにはならないのである。頑張れば他の楽器もそれなりに大きな音は出るが、決して心地よい音にはならない。プロは音量と響きの加減を心得ているので、全体で心地よい響きとなるように、自分の音だけが聞こえてしまうような強

さでは決して吹かない。その結果、プロフェッショナルであるNHK交響楽団員の音量は、アマより小さくなってしまいうらしい。

ところで、フォルテの反対はピアノ（弱く）であり、当たり前だがフォルテばかりでも、ピアノばかりでもつまらない音楽になる。強弱も大切な音楽表現の手段なので、フォルテとピアノを具合良く組み合わせて演奏される。もちろん譜面にも強弱の指示が書き込まれていることが多い。さて、残念なことに、私を含めてアマはピアノ、ピアノニッシモが苦手である。ピアノで吹くとフルートは音程が下がり、オーボエ・クラリネット・ファゴット・ホルンは音程が上がる。吹奏楽器は、ドンドン弱くしていくと最終的に音が出なくなるのは容易に想像できる。プロは音程の変化を最小限に、かなり弱めて吹いても途切れないような技術を持っている。

当たり前だが、プロはフォルテと対をなすピアノを、アマチュアよりも弱く演奏できる。ということは、フォルテを無理に大きく吹く必要はなく、心地よい響きの強さで吹いて音楽を表現できる。

こんなことは、演奏経験を積むと理解できるので、何とつまらぬことを書いていると笑われる。そうでない人は「何でプロのフォルテは弱いのか？」と疑問を感じてしまうであろう。その辺の事情を察して心地よい響きを堪能していただけると幸いである。

松本清張の「モーツァルトの伯楽」考（下）

会員番号 K.203 松田至弘

モーツァルトの死の原因

モーツァルトは、35歳の若さでこの世を去った。死因は検死の結果、急性粟粒発疹熱と診断され、聖シュテファン大聖堂の死亡者名簿に記載され、遺体は市街地の中心から4キロ以上離れた聖マルクス墓地へ埋葬された。

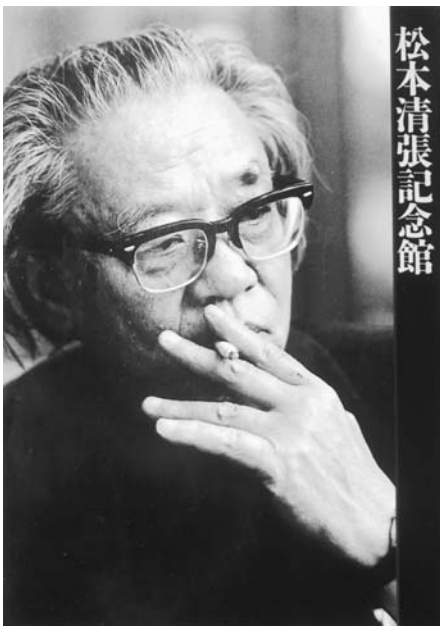
しかし、この天才作曲家の早世と死にまつわる謎は多く、当初からさまざまな推測・主張が行われ、200年を越えて激しく論議されてきた。病死説、瀉血致死説、毒殺説、中毒説、伝染病説など、その死因説のあまりの多さと複雑さには、ただただ驚かされる。

新しい説としては、トリヒナ症（旋毛虫感染症）説まで登場している始末である。これはモーツァルトが、トリヒナという寄生虫の幼虫で汚染されたポークカツレツを食べたために感染してしまい死亡したとする説である。

海老澤敏氏によると、細かく分類整理した場合、優に100、あるいは150もの数に上る死因が提示されているという。

*

それでは、松本清張の場合は、この問題をど



松本清張記念館

作家松本清張の肖像（松本清張記念館）

う考え、どのような推論を展開しているのだろうか。

「モーツァルトの伯楽」のなかで主人公の男は、訪れた聖マルクス墓地のモーツァルトの粗末な墓碑の前で、毒殺説を取り上げ3人の容疑者が噂されているとする。そして、ウィーンの宮廷作曲家アントニオ・サリエリ、フリーメイソンの暗殺団員、モーツァルトの妻コンスタンツェの名前を挙げるが、これについてはどれも絶対あり得ない、ナンセンスな嫌疑だとして否定する。

その上で、モーツァルトが梅毒に罹っていたとする説を持ちだして次のように断言する。

「その説はこう云っている、モーツァルトは危険な社交遊戯の場所に足をを入れていた。彼は梅毒になったと自覚すると、救いを友人のスヴィーテン男爵に求めた。スヴィーテンの父親はさきほどもふれたようにマリア・テレジアの侍医であって、梅毒の特効薬に水銀剤を開発した名医だ。水銀剤は有毒なために危険を避けて極度に薄められて処方されていた。父親はその処方を熟知していたが、息子のスヴィーテン男爵は専門医でないためその分量を誤ってモーツァルトに与えていた。モーツァルトは水銀中毒にかかって患いつき、数カ月後に死んだ。

、、、、新しい研究によれば彼は《腎臓病からくる長い無力性尿毒症昏睡で死んだ》となっている。その症状はまさしく慢性水銀中毒のそれなのだ。これによって、モーツァルトの死をめぐるあらゆるこれまでの不可解な問題、すなわちあらゆる謎がコーディアン・ノットを断ち切るようにたちどころに解けてくるね。」

さらに男は、「スヴィーテン男爵は自分の失敗を知っていた」とし、「葬儀と埋葬とを迅速のごとき速さで終了させたのはそのためである。、、、、天才作曲家の葬儀を聖シュテファン寺院の大礼拝堂を避けて、その裏手のクロイ

ツ・カペレにし、墓地の埋葬も第三級という貧困者なみの扱いにしたのは、その葬送をできるだけ目立たないようにしたかったからで、会葬者の人数も極端に制限した。」と独自の見解を述べる。

主人公の男に語らせた上記の言葉から察すると、松本清張はモーツァルトの死因を病死説と毒殺説に求めず、スヴィーテン男爵による梅毒治療薬の水銀剤の投与ミスから生じた慢性水銀中毒と考えていたことになるであろう。

この作品は小説であり、松本清張は物語を面白くするためにそのような説を取り入れたのであって、自分の真の考えは別にあるはずだという意見もあるに違いない。

そうかもしれないが筆者には、どうしてもそのようなには思えない。松本清張が、いろいろな参考資料に当たり周到に検討して、その時点で導き出した推論に、さらにいろいろな事柄を組み合わせ、主人公の男に投影して表現したものと考えたい。

*

この作品を書くに当たって松本清張は、海老沢敏『モーツァルトの生涯』、属啓成『モーツァルト・I 《生涯篇》』、エーゴン・コモルチュンスキ（須永恒雄抄訳）『シカネーダー』を参考にしているが、これらの著作にはモーツァルトの死因について詳しく記されていない。

そこで、松本清張がこの作品を執筆する以前に出版された書籍で、モーツァルトの死と水銀中毒とを結びつけているものや評伝のなかで水銀中毒説に触れているものがないかを調べてみた。

その結果、ディター・ケルナー（石山昱夫訳）『大音楽家の病歴—秘められた伝記（1）』、ヨハネス・ダルヒョウ、グンター・ドゥーダ、ディター・ケルナー（海老沢敏、飯島智子共訳）『モーツァルトの毒殺（I）・（II）』、ヴォルフガング・ヒルデスハイマー『モーツァルト』などが出版されていたことを知った。

モーツァルトが医薬品として水銀剤を用い、慢性水銀中毒の犠牲になって死亡したというのは、ドイツの内科医ディター・ケルナーの主張



毒殺説及び水銀中毒説に触れている書籍

であった。そして、このセンセーショナルな主張は毒殺説と結びつき、フリーメイソンによる毒殺説などに拡大されたのである。

ヴォルフガング・ヒルデスハイマーは、評伝『モーツァルト』のなかで水銀中毒説に触れているが、その信憑性は疑問視している。ただし、モーツァルトが「市民的なファンタジーがあとを追ってゆく気にならないようなところに、慰安を求めた」ということは全くあり得ないことではないとし、「かりに、偉大な梅毒患者の一人としても、彼はどのみち、そうでない場合におとらず、18・9世紀の最も偉大な精神の持主たちの仲間に入ることであろう。」と記している。

これらの書籍（あるいはその内容を紹介した論稿）は、公にされた当時、多くの読者の興味を誘って大きな反響を巻き起こしたようである。

確かなことはわからないが、松本清張が「モーツァルトの伯楽」を構想・執筆するに当たって、何らかの影響を受けたことが推測されるのである。

*

松本清張が「モーツァルトの伯楽」を発表してから、はや25年以上が経過したことになる。そして、モーツァルト梅毒説や死因を水銀中毒に求める説は、今日では支持されなくなっている。

紙数の関係で詳しく説明することはできないが、次のことは指摘しておきたい。

モーツァルトの時代、ウィーンは皇帝ヨーゼフ2世の自由化政策のもとで開放的な啓蒙都市

に変容を遂げたのであり、一般的に人々は、世俗の快楽に価値を見出しそれを求める傾向にあった。

画家で美術出版業者のヒエロニムス・レッシェンコールは、ウィーンの有名な繁華街グラベン大通りを散策し客を勧誘する娼婦たちの様子を色刷り銅版画にして残している。こんな状況もあって梅毒（当時、この言葉は性病一般をあらわす言葉として使われていた）は、実に多くの国民に広がっていたのである。

この梅毒という病を、水銀剤を使って治療する方法を開発したのが、女帝マリア・テレジアの側近、侍医であったゲラルト・ヴァン・スヴィーテンで、1757年頃から患者の治療に当たった。

モーツァルトと親しく、よき理解者で保護者的役割を果たしたスヴィーテン男爵は、その息子である。

男爵は医学とは全く関係がなく、外交官として各地に赴任し活躍した後、ウィーンの宮廷図書館長を務めた。バロック音楽の楽譜の収集家であり、大変造詣が深くウィーンで最高の音楽通とされた。

モーツァルトはしばしば、男爵邸や宮廷図書

館に足を運び、演奏したりバッハやヘンデルの作品に接し研究を深めたりしたのである。

モーツァルト梅毒説と水銀中毒説は、これらの人物と事柄とを結びつけ、最初はややふやな噂として登場したものと考えられる。そして、それはやがて、真実なものとして語られたり書かれたりするようになり、遂には伝説化するに至ったのである。可能性まで否定するつもりはないが、どちらの説も信じるに足る客観的な証拠を欠いている。

ヒルデスハイマーは、「モーツァルトがスヴィーテン家での音楽会から、バッハやヘンデルの楽譜以外のものを家にもちかえたとはいえない。水銀をもちかえらなかったことはたしかであろう。」と述べている。

スヴィーテン男爵がモーツァルトの葬儀を取りしきり、一般市民のための費用の安い第三等級葬儀にしたのは、男爵が自分の失敗を知っていて葬儀・埋葬を目立たなくするためからではなかった。

それは、皇帝ヨーゼフ2世が社会改革の一環として行った葬儀の簡素化と埋葬の簡略化政策の影響という事実位置づけ理解されなければならぬのである。

酒とモツの日々 (38)

会員番号 K.488 佐藤 滋

私は、お酒もケーキも大好きです！

こういう輩を文豪・夏目漱石は小説「門」のなかで「酒も呑み、茶も呑み、飯も菓子も食べる様に出来た重宝で健康な男」と、羨望と軽侮をもって揶揄していますが、これが私とモーツァルトとの数少ない共通点なのです。（ちなみに漱石は甘い物は大好きですが酒は嫌いでした。当広場の加藤代表と同じです。）モーツァルトと漱石の創作上の共通点とすれば、大量の原稿に書き損じがほとんど無いということでしょうか。二人とも確かに凄い天才です。でも個人としてはどうだったのか。食生活は真逆で

も、性格や思いに通じるものはなかったのでしょうか。

昨年の12月9日は夏目漱石の没後100年記念日。その後、今年も数々のイベントがあったので、この機会に読み直した方も多と思います。彼が何故「文豪」と呼ばれるのか。これは素人考えですが、小品から大作まで、実に多彩な作品を膨大に生み出した、そして全ての作品に漱石という人の人間観察が一貫して流れているからではないか。寡作の人は勿論のこと、推理小説ばかりを沢山書く人も、作品の出来不出来が激しい人のことも「文豪」とは呼びません。明

治期の新しい小説の在り方を開拓した先駆者、それでいて文章表現が個性的かつ実に上手い。現代小説にありがちな、いかにもこしらえた、作者の得意顔が浮かんでくるような、こじられた表現が一つも無い。美文のレベルが違う。しかも「我が輩は猫である」のような風刺小説、「坊っちゃん」のような学園小説、「虞美人草」のような勧善懲悪小説、「夢十夜」のような幻想小説、「草枕」のような耽美的美術論（グレン・グールドの愛読書）・・・さらに日本で一番読まれている「こころ」になると日本人のモラルや価値観を形作ったと思わせる程の存在感を感じるのです。また「野分」には演奏会の様子が記されていて、漱石が音楽に「色彩」を感じている興味深いシーンがあります。

ベートーヴェンがなぜ「楽聖」と呼ばれるのか。それは文豪と同じく「エリーゼの為に」のような一輪の花から「第九交響曲」のような人類の宝まで多彩な作品を膨大に生み出し、なおかつ全ての作品にベートーヴェンという人の作風が一貫して刻まれているからでしょう。その点、モーツァルトの「神童」という冠は彼の生涯の一時期しか表していません。彼こそは、美

空ひばりのように、神童の時期を過ぎた頃に本当の凄さを発揮してくる数少ない早熟型天才でした。「昭和の歌姫」のような、モーツァルトの全存在に最も相応しい新しい冠を与えてはいけないと思っています。

漱石を含めて、この人たちに共通するのは、偉大な創造に比しての、個人的な幸福の乏しさでした。「ジュピター」や「魔笛」のような人類史に残る偉大な作品の蔭に咲く一輪の花「すみれ k476」（・・・人知れず咲いたすみれが羊飼いの少女に摘まれたいと願い、その足に踏まれて息絶えながら、なお少女に踏まれて死ぬことに幸福を感じる、という歌曲の傑作。ゲーテの詩にモーツァルト自身も加筆している。）には、神に愛されすぎた故に、人の愛を渴望するモーツァルトの小心な、そして一途な魂のつぶやきが聴こえます。その思いは、苛烈な期待と、限られた執筆時間、神経衰弱や孤独、胃病に苦しみ早世した漱石にも通じるものだったのでしょう。

「堇(すみれ)ほど 小さき人に生まれたし」
(夏目漱石)

事務局より

今は小学4年生になると2分の1成人式という行事があるそうです。2分の1つまり10歳の御祝いをしましょうとのこと。少子化のあおりで子供向けの行事が増えているこの時代、でも人生100年ともいわれ平均寿命は年々伸びています。近い将来60歳で退職ではなく70、80になっても元気で過ごせることが当たり前になってくるのかなと想像できます

ね。モーツァルト広場もまだ成人を迎えたいばかり。人生100年、そう考えるとまだまだいろいろいろなことにチャレンジしなければいけませんね。みなさんもどうか長い目で、温かい目でこの広場を見守り、愛していただきたいなど改めて感じている今日この頃。みなさんも元気に100年ライフを満喫いたしましょう。
(K575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております(H29年12月現在95名)

モーツァルト広場

検索

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000（諸会費、別途）

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058

又は 本田（事務局）080(1673)8322